

帝塚山派文学学会 会報 第23号

発行日：2024年12月28日

事務局：〒558-0053 大阪市住吉区帝塚山学中 3-10-51 帝塚山学院内

実務事務局：電話 080-1460-6616 / Mail: telite2016@maia.eonet.ne.jp

第24回研究会報告

2024年9月29日（日）午後1時30分より4時まで帝塚山学院本部棟同窓会ホールにおいて第24回研究会が会員13名の参加のもとに開催されました。

第一の発表は本学会会員の伊藤かおりさんによる「庄野英二の童話集『小鳥の森』の児童文学史における位置」でした。

まず、現在の児童文学史において、庄野が主要な児童文学者として取り上げられていないという残念な事実が示されました。今回の発表はその原因を『童話集 小鳥の森』に絞って考察されたものでした。『小鳥の森』は庄野が復員した1946年から64年暮までに新聞や雑誌に発表した短い作品から選んで編んだ童話集で、1965年に刊行されました。その特徴は全34篇の内にフィクションと随筆と言っていい作品が混合していることです。庄野が師と仰ぐ坪田譲治は現実の子供の生活を語る童話、いわゆる生活童話を提唱し、もう一人の師小川未明はファンタジーを提唱しました。庄野はその両方の混合を童話とする独自の定義に従って創作したのです。しかし、その結果ジャンルが曖昧になっただけでなく、1959年に刊行され、現代童話の始まりとされる佐藤さとの『だれも知らない小さな国』の特徴であるストーリー性の強い小説形式の童話という流れから外れてしまったのです。さらに児童文学には思想性がなければならないという児童文学研究者鳥越信の主張にも庄野は与しませんでした。庄野を再評価するためには庄野の童話観を明確にすることが必要である、という結論でした。次回の発表を期待したいと思います。

続いて、本学会会員下定雅弘さんにより「伊東静雄『詩集 春のいそぎ』の詩境」と題する発表が行われました。昭和18（1943）年に刊行された『詩集 春のいそぎ』所収の全詩が資料として配られ、その一つ一つについて丁寧な評釈が加えられました。

本詩集について、伊東は前作の『夏花』（昭和15、1940年刊）の陰鬱な詩風よりも「いい出来」だと思いと自ら述べています。本発表では、彼が何をもってそう判断しているのかが論じられました。また、戦後桑原武夫らにより『伊東静雄詩集』（昭和28、1953年、創元社）が刊行された際、本詩集所収の7編の戦争詩が削除されましたが、それらはなぜ削除されたのか、削除される必要があったのかにも説き及ばれました。さらに、『万葉集』の語彙が多く用いられていること、叙事、叙景の詩において自身が何を思ったのかは書かれないこと等が特徴として挙げられ、本詩集をトータルに評価しようとの試みでした。ただ、発表時間の制限から後半の詩の評釈が割愛されてしまったのが惜しまれます。

発表後には、主に戦争詩の評価をめぐって、きわめて活発な質疑応答がなされました。

第25回研究会報告

2024年12月15日（日）午後1時30分より4時50分まで帝塚山学院本部棟同窓会ホールにおいて第25回研究会が会員19名の参加のもとに開催されました。

第一の発表は、会員の宮坂康一さんによる「杉山平一の詩集未収録詩を読む（その一）—幻の第二詩集『階段』—」でした。『杉山平一全詩集』は、全詩集と銘打ちながら、杉山自身による選択がなされ、未収録の作品があります。本発表では、その未収録詩のうち昭和二十年代のものを対象に、初出の雑誌に遡って捜索し、それらの詩にうかがえる杉山の発想を丁寧にすくいあげ、説明が加えられました。次いで、刊行を予定されながら、実際には刊行されなかった第二詩集『階段』がとりあげられました。叙情作品が未収録あるいは未刊となった理由を、戦後に四季派へ向けられた批判や三好達治からの評価を慮った可能性が示されました。四季派詩人として、杉山が戦中戦後に当たらざるを得なかった苦難があぶり出され、さらに、彼の帝塚山派詩人としての特徴もうかがえる発表でした。

第二の発表は運営委員の福島理子さんによる「小野十三郎の詩法と金時鐘」でした。これは紀要第八号に掲載された論文「小野十三郎、詩論の形成」を一步進められたものです。論文では、日本の「叙景詩の伝統をも断ち切った」小野の初期の詩が中心でした。今回は「抒情の否定が詩作の動機となっている事がある」という『詩論』140に見られる小野の狙い、つまり「もののあわれ」を詠む伝統的な詩歌のあり方を否定し、本当の歌を取り戻そうと試みた小野、という方向へ踏み出されたのです。「抒情の否定が詩作の動機となった例として、小野の詩に影響を受けて詩を描き始めた、小野より26歳若い在日コリアンの詩人金時鐘の詩が取り上げられました。金は昭和4年に日本統治下の釜山に生まれ、皇国少年として育ち、日本の敗戦により解放されながら朝鮮動乱による民族同士の激しい争いを経験し、大阪猪飼野に逃れてきたのです。幼い頃、金は文部省唱歌で育ち、詩とは、美とはそういうものだと思い込んでいました。ある日道頓堀の古本屋で手にして読んだ小野の『詩論』が金の思い込みを根底からひっくり返したのです。最初、文部省唱歌の影響が見られる詩を書いた金は在日コリアンが多く住む猪飼野を「抒情を否定」した独自の詩に書くようになります。小野はその金の詩に触発され、新たな詩を書くようになるのです。非常に興味深い発表でした。

第三の発表は会員の永岡正己さんによる「長沖一の初期詩篇について」でした。永岡さんは本学会「紀要」創刊号において「長沖一 略年譜・主要作品（未定稿）」を発表されていて、ここでは展開されていなかった初期詩篇について論じられました。

まず、戦後1949年の「創芸」1号に長沖が書いた回想文の「文学的出発」が資料として提示され、「大高生の時分だが、最初、私は萩原朔太郎の詩集『月に吠える』などからの影響を受けた」こと、「ポールモーランが新感覚派と内外呼応して私たちに刺激した」ことなど、詩作の発端を明らかにされた。最初に1923年大阪高等学校に入学した19歳の時、回覧同人誌「花冠」1号に詩を4編発表します。その中の長興一名で発表された「満月断層」の全文が資料提示されました。続いて第2号に詩を5編、第4号には小説を発表しています。批評家で藤澤桓夫は「一種の情調が、魂の生地のように仄めいて居る」と評価しています。

さらに、回覧雑誌「龍航」の4号に詩3編、第6号に詩2編と詩作は継続され、最後の詩の発表と思われる「女房」が長沖家所蔵資料から示されたのは、大変貴重な紹介となりました。以降、東京帝国大学に入学してからは1927年から「辻馬車」の編集同人になり、小説を発表するようになりました。長沖自身も習作段階とみなしていた初期詩篇について、詳細に研究された貴重な報告でした。

2024年度 研究会開催予定

第26回研究会 2025年3月2日（日）13:30～16:00

- ① 高橋俊郎 副代表（藤沢桓夫関係）
- ② 増田周子 運営委員（藤沢桓夫関係）